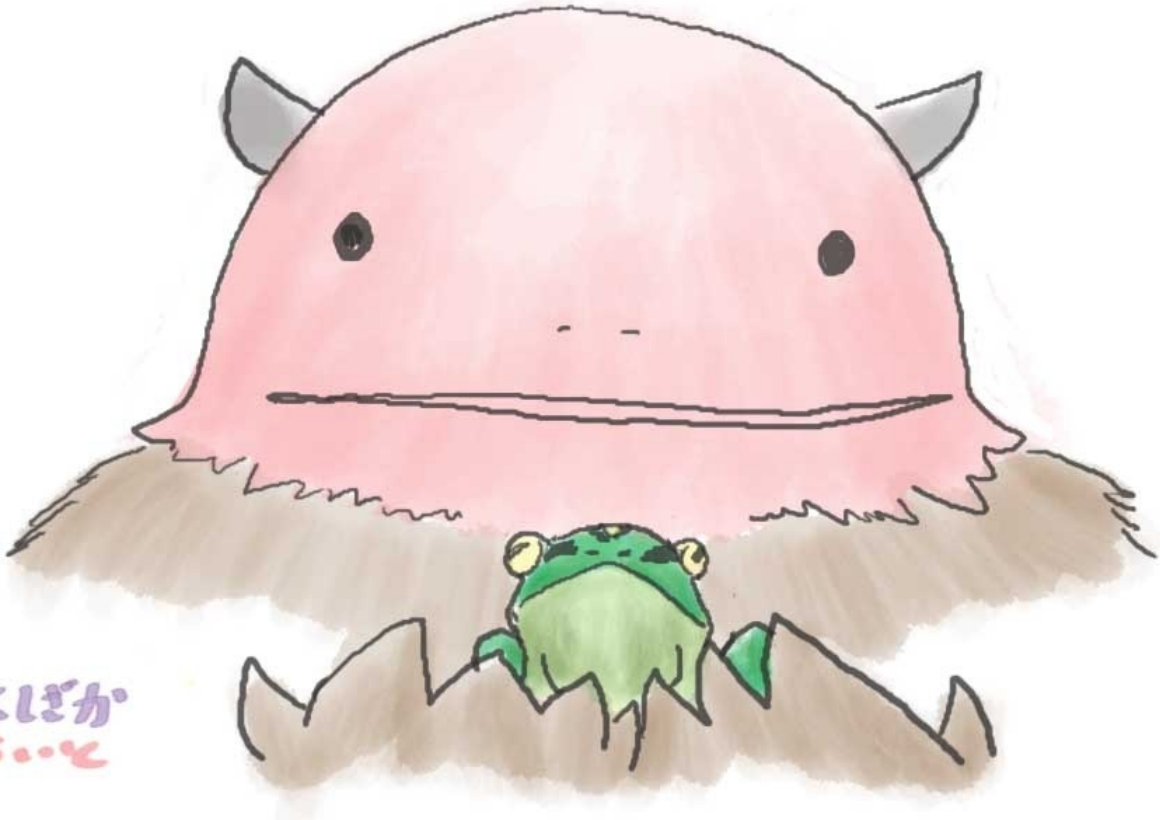
シャングリラランドの
マルガリータ・ド・トロフス



作 にしぎか
5…と

町外れの丘の上にあるテーマパーク「シャングリランド」には

大勢の親子連れや若者達が毎日やって来て

それはそれは大にぎわいでした。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。みんな笑顔で楽しんでるかい？」

彼はシャングリランドの人気者。

みんなの笑顔を見るのが何よりの幸せでした。

泣いている男の子を見つけると、もう放っておけないマルガリータ。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・ロフス。君はどうして泣いているの？」

「え～ん！え～ん！お母さんとはぐれちゃったの！」

マルガリータは言いました。

「大丈夫、僕と一緒にいればきっとお母さんに会えるよ。さあ泣かないでコレをお食べ」

マルガリータは大好物のチョコレートドーナッツを男の子にあげました。

一後の仕事が終わると、シャングリランドの中にあるお家の中で

ゆっくりと過ごすのがマルガリータの日課です。

そこからは、丘のふもとの街の灯がいつもキラキラ輝いて見えていました。

ある晩、マルガリータはシャングリランドを抜け出して街へ行ってみる事にしました。

鞄には大好物のチョコレートドーナッツを一つ入れ、山道を下って歩いていきました。

すると大きな道路に着きました。

パーキングエリアには、夜だというのに多くの人が休憩していました。

でもみんな眠そうな、疲れたような顔ばかりです。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。浮かない顔でどうしたの？

楽しい事を考えてニコニコ笑おう、きっと楽しい気分になるよ」

疲れた顔のトラックドライバーは答えます。

「ここ最近はずっと不景気でねえ、笑える事なんざ一つもないんだよ。

それにへらへら笑っている余裕があれば、そのぶんベッドでぐっすり寝たいねえ」

そう言うとトラックドライバーは、大きなトラックに乗り込んで、

大きなハンドル握りしめ、大きな音で走り去って行きました。

マルガリータは街へ着きました。

夜も深い時間、街には人通りがなくとっても静かなものでした。

そこへ向こうから、お酒に酔ったおじさんが、あっちへふらふらこっちへふらふら、

顔を真っ赤にさせて歩いてきました。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。笑顔がとっても好きなんだ」

おじさんは真っ赤な顔をくいっとひねり、こう言いました。

「ま、まるがり？・・・ヒック。なんだ？毛むくじゃらじゃねえか。・・・ヒック。

なにをわけのわかんないこと・・・ヒック。言ってるんですかあ？・・・ヒック」

それだけ言うとおじさんは、あっちへふらふらこっちへふらふら歩いて行きました。

お日さまが昇ると、街にも朝がやってきました。

マルガリータは大きなビルが沢山ある駅へとやってきました。

すると駅から大勢の黒服の人達が、ぞろぞろぞろぞろやってきました。

みんなメガネをかけていて、ピカピカの靴をコツコツ鳴らして、

なんだか浮かない顔をして、ムスッと無言で歩いていました。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。みんな笑顔で楽しく歌おう」

マルガリータがそう言ってみても、黒服の人達は誰ひとり相手にしてくれません。

時々大きく目を開けて、不思議そうにマルガリータをチラリと見るだけで

みんな自分に関係ないといった感じでした。

マルガリータは少し悲しくなりました。

マルガリータが歩いていると、前から盲導犬を連れて歩いてくる人がいました。

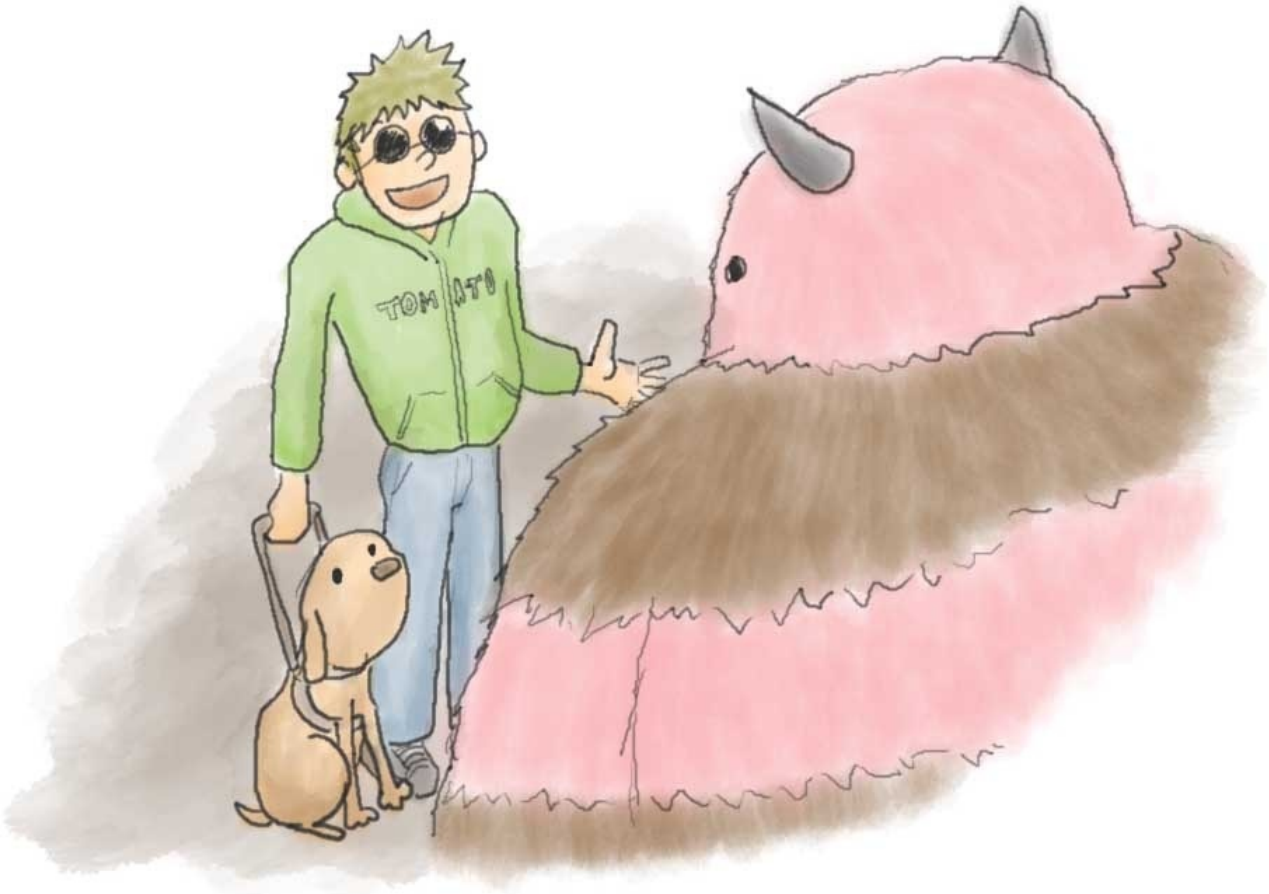
「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。笑顔がとっても好きなんだ」

盲導犬を連れた人は、にっこりと笑いました。

「やあ、キミはもしかして、シャングリランドのマルガリータ？

嬉しいな。僕がまだ目が見えた頃、シャングリランドに遊びに行ったことがあるよ」

マルガリータもにっこりと笑いました。



でもそばに座っている盲導犬は、目をパチパチさせるだけで

やっぱり浮かない顔をしていました。

「犬くん元気がなさそうだけど、どうかしたのな？」

「え？いやあ、こいつも楽しいって言っているよ。

飛んだり跳ねたりしないから少しわかりにくいかな？」

「なるほどー」マルガリータはそんなこともあるんだなあ、とうなずきました。

マルガリータが歩いていると、前から若い女の人達がやってきました。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。ご機嫌いかが？」

「あれ！？マルガリータだ！？」「わー！！かわいい！シャングリランドのマルガリータね！」

若い女の人達はマルガリータを見るなりみんな笑顔になりました。

その様子を見てマルガリータも笑顔です。

若い女の人達はマルガリータの周りで、わいわい騒いだり記念撮影を始めました。

小さな女の子が、お母さんの手を離れてこちらへやってきました。

「シャングリランドのマルガリータ！」

そう叫んでみますが、若い女の人達のお尻にぶつかって倒れてしまいました。

倒れた女の子は、しくしく泣きながらお母さんのもとに帰って行きました。

マルガリータはその様子を見て悲しくなりました。

マルガリータはお腹が空いたのでご飯を食べることにしました。

鞄の中からチョコレートドーナッツをとりだしました。

マルガリータが大きな口を開けたその時、物陰からゴソゴソと音がしました。

ゴミ捨て場で、お腹を空かせた浮浪者が食べ物を探していたのです。

それを見たマルガリータは放ってはおけません。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。良かったらこれをお食べ」

マルガリータは浮浪者にチョコレートドーナッツをさしだしました。

その時です。大きなゴミ袋がぴゅ～んと飛んで来て、マルガリータの頭にバチン！

ゴミ袋はマルガリータの立派な角でビリリッと破れ、いちめんゴミだらけです。

その拍子にチョコレートドーナッツもどこかへ飛んでいってしまいました。

マルガリータはすっかり悲しくなりました。

マルガリータがとぼとぼと歩いていると、どこからか声が聞こえてきます。

「お～い・・・誰か・・・助けてくれ～」

ふと見ると、そこには小さな緑色のカエルが一匹ぐったりと倒れていました。

「やあ、僕はマルガリータ・ド・トロフス。ぼくに何か出来ることはある？」

「ひい助かった！・・・頼む、水がある所まで運んで行ってくれないか？

水が無くて干からびそうなんだ」

これは大変だと思ったマルガリータは、急いで橋の上へカエルを連れて行きました。

しかし、あんまり急いで走っていたので、通りがかった人とゴツンとぶつかってしまいました。

その拍子にカエルはピョーンと飛ばされて、橋の下を流れる川へポチャリ。

カエルは気持ち良さそうに泳いでいきました。

それを見てマルガリータはひと安心しました。

ところが

「あなたいったいどこを見て歩いていたの！！急に飛び出したら危ないじゃないの！」

マルガリータが橋の上でうっかりぶつかった婦人は、顔を真っ赤にして怒りました。

「ケガでもしたら一体どう責任をとって下さるの！？

それに何なのかしらあなた、ゴミだらけで汚らしい！」

マルガリータはすぐに謝りました。

「ごめんなさい。カエルくんがとっても大変だったので・・・」

「カエル？冗談じゃないわ！どうしてあたしがそんなものの為に

痛い思いをしなければならないの！？ああ不愉快だわ！」

そう言うと、婦人は顔を真っ赤にさせて行ってしまいました。

マルガリータはいよいよ悲しくなりました。

マルガリータがベンチに腰掛けてすっかり落ち込んでいると、さっきのカエルがやってきました
。

「やあマルガリータ！さっきは本当にありがとう！おかげで命が助かったよ！

・・・おやおや、どうしたんだい？元気がないじゃないか！」

「僕はみんなの笑顔が大好きだったのに。

もう僕はシャングリランドに来る人を笑顔にさせる自信がないよ」

そう言うと、マルガリータは涙を一粒こぼしました。

「そんなことないぞ！マルガリータ！キミは優しい心を持った素晴らしい人さ！

世の中には自分勝手な人ばかりじゃない、キミのように優しい人も沢山いるはずさ！」

「そうかなあ」

「きっとそうさ！世界は広いんだぜ！」

そう言われると、なんだか元気が出てきました。

カエルは元気に言いました。

「俺はそう信じて、世界中を旅してるのさ！じゃあな！」

カエルはぴょ～んとジャンプして去って行きました。

その時です、真っ赤な車がもの凄いスピードでやってきました。

「あぶない！！！」

マルガリータがそう言い終わらないうちに、真っ赤な車がぶおおおおんっ！

大きな音をあげて通り過ぎて行きました。

マルガリータが慌ててかけてゆくと

そこには、ぺちゃんこになってもう動かないカエルがいました。

マルガリータは悲しくなって泣きました。

わんわんわんわん泣きました。

こんなに泣いたのは、生まれて初めてでした。

そこにひとりの男の子がやってきました。

「ねえ、君はマルガリータ？」

マルガリータは大きな口を開けて、男の子を追い返そうと思いました。

こんな気持ちは初めてでした。

すると男の子は言いました。

「どうして泣いているの？悲しいことでもあったの？よかったらコレを食べて！」

男の子は手のひらの上のアメ玉をマルガリータにさしだしました。

よく見ると、その子はマルガリータがシャングリランドで出会った男の子でした。

マルガリータはポカンとして男の子のアメ玉を眺めていると、他の子供達も集まってきました。

「あたしのクッキーもあげる！元気出して！」

「僕のチョコもやるよ！だから泣かないで！」

「どこか痛いの？あたしがなでなでしてあげる！そしたらきっと治るわ！」

マルガリータの涙はぴたりと止みました。

そしてとても温かい気持ちになりました。

「みんな、ありがとう」

そして街へ来てはじめて、心の底から笑顔になれたのです。

シャングリランドに帰ったマルガリータは、毎日笑顔で仕事をしました。

みんなの笑顔が大好きだからです。

しかし、前とちがっている事が一つだけありました。

それは、笑顔の時に優しい気持ちを込めること。

優しい気持ちの大切さを、マルガリータは知っているから。

おわり